

初めて災害ボランティアをしようとする皆さまへ  
～2021年10月 給水ボランティア活動参加学生からのメッセージ～



和歌山大学災害科学・レジリエンス共創センターでは、「防災・減災・復興の担い手づくり」を活動目標に掲げています。将来発生するかもしれない災害に備えて、ボランティア活動に率先して取り組むことができる学生や教職員が増えるよう学びの機会をつくっています。

2021年10月3日(日)の六十谷水管橋崩落により、和歌山市北部で大規模な断水が発生した際、地元のピンチに立ち上がろうと、和歌山大学の学生・教職員が、給水ボランティア活動を実施いたしました。

ボランティア活動を初めて体験した学生も多く、学生の皆さんが多くのことを感じとった様子が、それぞれの顔を見ていて感じられました。

そこで、本報告は、この給水ボランティア活動の体験を、これから初めて災害ボランティア活動に参加しようとする学生の行動のきっかけにできないかと作成いたしました。学生自身が、困っている人に接し、自分に何ができるかを考え、行動することで何が得られるかを知り、地域と共に成長する人材に近づいたことが、感想から読み取れます。

本報告には、初めての経験でドキドキする中、参加した様々なきっかけ(「助けたいから是非参加したい」や、それほど気負ったきっかけだけでなく、「時間があつたから」「就職活動に役に立つから」等)や、参加して知らない人とも接することでコミュニケーション力がついたこと、困っている人や地域の抱えている課題を知ることができたこと、助け合うことの感動を実感したこと、感謝されて次の機会もボランティアしよう意識が変化したこと、ボランティアの心構え(相手の立場に立つこと、無理をしないこと等)、自ら動く積極性と仲間と協力する柔軟性のバランスをとること、自分より意識の高い人と出会うことができ自分も意識が上がったこと、高齢化した地域社会で若い力が役に立つことを実感したこと、などなど給水ボランティア活動に参加してくれた学生の皆さんの体験がたくさん詰まっています。

これを読まれて、災害ボランティア活動に一步踏み出し、活動を経験する中で自身も成長する学生が増えることを願っています。

和歌山大学 紀伊半島価値共創基幹  
災害科学・レジリエンス共創センター センター長 塚田晃司

## 給水ボランティア概要

実施日：10月5日（火）～8日（金）

参加人数：のべ79名

実施場所：貴志小学校、野崎西小学校

## 給水ボランティアに参加した学生の声



高校生のとき地元で起こった災害で、ボランティアをすることができず後悔していた。そのため、今回こそはボランティアを絶対しようと思った。活動に行って、何気ないコミュニケーションも大切だということも感じ、場を和ますこともできた。また、心の底から感謝され、ボランティアの必要性を感じたとともに、困っている人を助けることができ、やりがいも感じた。（柏幸輔、観光学部1年）

きっかけはボランティアに興味があったのでこの機会に参加してみたいと思ったからです。活動を通して、地域の人とかかわってコミュニケーションをとることの大切さと、周りに頼れる人のいない高齢者がたくさんいるということを実感しました。そして高齢者のお話から和歌山の現状を知り、課題を発見することができました。水は重かったけど、誰かの役に少しでも立てていると思うと、とてもうれしかったです。（りこ、教育学部1年）

ボランティアに参加したきっかけはむすぼらからのメールです。私は防災士の資格を取ったこともあり、ずっとボランティア活動をしてみたいと思っていました。活動を通して学んだことはボランティアの心構えです。相手がしてほしいことをする（バックの水を一つ追加するなど）反対にしてほしくないことはしない（相手の写真を撮るなど）重要性を実感しました。また思ったようなボランティア活動ができなくても不満を言ったりせず、笑顔で帰ることも大切だと思いました。さらに仲間との協力も大切だと分かりました。つい自分一人で水を運ぼうとしがちですが、それは自分の体を壊したりミスも増えやすくするというリスクにつながると理解しました。さらにボランティアの仲間から頼られる嬉しさも実感しました。給水ボランティアに参加して本当に良かったです。（教育学部1年）

きっかけは、以前からボランティア活動に興味を待っていたからです。活動を行ってみて、自分から動かないといけないので、積極性や柔軟性の必要性を学びました。（田川享逸、経済学部1年）

"断水した翌日から地域の方の給水活動を手伝っていた。その中で「水が運べない高齢者の方がいる」と聞き、それをゼミの先生に伝えたら直ぐに和太でボランティアの募集がかかったので参加した。

特に加太地区はアップダウンの激しい道が多くて学校の先生が無償で水を配っていたらしく、今回私が行けたのは貴志小だけだったので、そっちの方でも手伝いたかった。(教育学部3年)

私が今回の給水ボランティアに参加したきっかけは、学生時代に一度はボランティア活動をしてみようと考えていたからでした。実際に参加して、人々の生活において何気なく使っている社会インフラがいかに大切であるかがわかりました。また、感謝の言葉も頂く時もあり、ボランティアに参加して良かったと感じました。(梅本、経済学部3年)

参加した理由は、授業がオンデマンドになって、緊急事態宣言明けで暇だったから。活動を行って学んだことは、大学での学びは授業だけではないということ。また、ボランティアしたから偉いとかではなく、助け合える社会であることが当たり前であると今回感じる事ができて有意義な体験だった。(システム工学部1年)

学生時分に一度はボランティア活動をしたいと考えていたからとボランティア活動場所が近場だったからです。(経済学部2年)

私が参加した理由は、大学が休講になった中、「ボランティア募集」と告知されたメールがきっかけでした。

今回、初めてボランティア活動に参加しましたが、現場を体験して行動に正解がないことを実感しました。活動しないとわからない反省点もありましたが、少しでも何かプラスなことができていたらいいなと思いました。また、一緒に参加されたみなさまは、我先にと向かえるような、意識が高いとても素敵な方々でした。

初日しか参加できませんでしたが、お世話になっている地域で、何か力になっていれば幸いです。(みるくてい、システム工学部大学院1年)

就活のため。(システム工学部3年)

西日本豪雨の時に私の地域は断水になり、自衛隊やボランティアの方の支援が非常にありがたかった。そのため、私も困っている人の役に立ちたいと思い、ボランティアに参加した。ボランティアをして、少しでも人の役に立てたことが嬉しかったし、他のボランティアにも積極的に参加したいと思えるようになった。(平井冨佳、観光学部3年)

参加した理由は、断水で困っている地域住民の役に立ちたいと思ったからです。私は今までボランティア活動に参加したことがなかったので、これはいい機会になるだろうと思い参加しました。実際に参加してみて、地域の方々から「ありがとう」という声をたくさん頂いて、本当に参加してよかったと思いました。同時に、このような災害が今後起こった時、是非またボランティアに参加したいと思いました。(経済学部3年)

たくさんの国民と対話する機会が増えた。(和歌山まもる君)

大学入学当初からなんとなくボランティア活動に参加してみたいとは思っていたものの、なかなか行動できておらず、今回大学からのメールを見て参加してみようと思いました。(経済学部、3年)

人が困っているときには、人による助けが必要かつ有効だから(無記名)

私は和歌山市南部に在住し、断水の被害を受けなかった。しかし同じ和歌山市でも北部地域は断水したためその人たちに何かしたいと思い活動に参加した。とにかく「動ける人が動かない」という気持ちだった。(川原朋也、経済学部1年)

参加したきっかけはメールで送られてきたので参加しました。ただ、元々ボランティアに興味があり、高校生の頃はJRC部の副部長をしていました。(筋トレ大好き男)

和歌山に住む友達が被害を受けているのを知って、参加しようと思いました。ボランティア自体参加することは今回が初めてで、参加前はうまくできるか不安がありました。実際ボランティア中にも給水に来られた方への対処は適切であったかなど色々悩むことはありました。しかし、完璧に出来なかったとしても、自分自身ができる限りでお手伝いをするということが大切になってくるということ、このボランティアをとして学びました。

勿論、被災された方への配慮を忘れないことはあたりまえですが、完璧に出来なかったとしても気に病むことなく、気軽に参加することが大事だとわかりました。(経済学部、3年)

私が給水ボランティアに参加しようとしたきっかけは、自分の家も断水してお水をもらいに行ったとき、お年寄りや小さい子供が大変そうに水を運んでいるのを見て、自分も何か力になれないかと感じていたことからでした。そんなとき、大学からボランティア募集のメールが届いて、是非力になりたいと参加させていただきました。私が参加した日はとても日差しが強く、すごく大変でしたが、地域の方々に感謝されるのはとても気持ちの良いものでした。またボランティアに参加する機会があれば、是非参加させていただきたいと思います。

大変な思いをされている人が沢山いて、助けられる距離にいるのに、見て見ぬふりをするのが嫌だったから。後で後悔する気がしたため。(みー、教育学部1年)

きっかけは大学のメールでした。自分も断水地区で大変な思いをしているために、何か苦勞を分かち合うことができるのではないかと、自分にもできることがあるのではないかと参加を決めました。活動を行なって、地域の方々と直にお話しできたこと、大学の先輩方ともたくさん交流できました。断水のお話だけではなく、昔のお話し、経験談など心が和む話題も多く活動の中で飛び交い、自分もがんばって断水を乗り切ろうという励みになりました。(無記名)

## 和歌山大学野球部も、給水ボランティアを実施いたしました。

実施日：10月7日と10月8日

参加人数：総勢91名（実数）

実施場所：参加給水所：9箇所（以下のとおり）

- ・貴志小学校
- ・野崎西小学校
- ・ふじと台小学校
- ・貴志南小学校
- ・木本小学校
- ・八幡台小学校
- ・楠見小学校
- ・楠見東小学校
- ・楠見西小学校

自分が住んでいるところも断水の影響で水が出ない中で生活を送っていたので、水が出ない中で生活する大変さを実感しました。お年寄りの方々など、自分たちよりも生活するのが大変な人のためにボランティアでその方々の力に少しでもなれたと思うと嬉しく感じました。

ボランティアを行っていく中でありがとうなどと感謝の気持ちを伝えてもらえると頑張っただけでよかったなと思えたので感謝の気持ちを伝えることの大切さを再確認することができました。（教育学部1年）

自分は和歌山市の海南市よりに住んでいるので、断水の影響は全くなく、災害意識は薄かったのですが、ボランティア初日に、八幡台小学校の前に水を求める人たちが作る長蛇の列を見て、とても驚愕しました。

自分が、こうした災害ボランティアに参加するのは初めてでした。

ボランティアを進めていくうちに、ヨロヨロと自転車を漕いだり、リアカーを押してくる高齢者の方の姿を見て、我々学生をはじめとした、若い力が非常に大事であることに改めて気付きました。

これから起こるとされている、南海トラフ地震のような災害が起こった際にも、学生をはじめとした若い力が、災害からの復興への道へは必要不可欠であると考えます。

今回のこの経験を、これからの生活にも生かしていきたいと思いました。（教育学部、1年）

今回ボランティア活動を行って、「ありがとう」、「助かった」、など、感謝されることが多くありました。感謝されることで、なぜかとても嬉しい気持ちになり、もっと手伝いたいという気持ちになりました。なにか報酬をもらったわけでもなく、ただ「ありがとう」という言葉をもっただけで、前向きな気持ちになりました。このことから、人とうまく付き合っていくためには「ありがとう」の気持ちを忘れてはいけないということを再認識させられました。ささいなことでも、感謝されると嬉しい気持ちになるということがわかり、大変貴重な経験になったので、ボランティア活動を行って良かったなと思います。（たくぞう、経済学部1年）

今まで私が行ったことのあるボランティアは、ゴミ拾いでした。それはあまり人と触れ合う機会があ

りませんでした。今回の給水ボランティアでは、実際に断水で困った方々と会話を交わして行うことが出来ました。困っている方々の力になれているということを実感することができ、とてもいい経験になりました。これからも、困っている人の力、助けになれるようにボランティア以外の生活でも気を配っていこうと思いました。(西上侑吾、経済学部2年)

注：ここに、把握しきれていませんが、他にも多く学生が、困った人の水を持ったりとボランティアとしておられることを断っておきます。ボランティアというほど本格的ではなくても、水を運ぶのをちょっと手伝ってあげたという人もいたことを注記しておきます。

(上記以外に、給水ボランティアをされた方で、感想がございます場合は、[bousai@ml.wakayama-u.ac.jp](mailto:bousai@ml.wakayama-u.ac.jp)までお寄せください。その感想を追加させていただきます。)

編集・発行

和歌山大学 紀伊半島価値共創基幹

災害科学・レジリエンス共創センター

〒640-8510 和歌山市栄谷 930

TEL 073-457-7558 FAX 073-457-7167

Email: [bousai@ml.wakayama-u.ac.jp](mailto:bousai@ml.wakayama-u.ac.jp)